校歌に関する調査研究Ⅱ

――福岡市と筑豊地区の中学校を中心に――

牛　島　達　郎

はじめに

私は福岡女学院大学研究紀要第11号（2001年２月発行）に，「校歌に関する調査研究１」として，福岡市立小学校（143校）の校歌をとりあげ，歌詞の分析を試みた。

その中で「校歌とは学校独自の教育方針と学校の環境を歌い，校風を発揚するために制定されたもの」(注1)と定義し，「教師と児童生徒によって学校が構成されることが当然のように，校歌も学校の構成員としての位置を確立している」(注2)と述べた。

校歌を分析してみると，その学校がどのような場所，環境の中にあるか，またどのような教育目標が織りこまれているかがわかる。

校歌を歌うことによって，自分がどのような地域環境で学び，自分の通っていた学校の教育目標は何にかを伝える最良の手段と言える。この校歌に関する研究を継続している途中（2000年６月３日，西日本新聞）に「炭鉱の歴史，校歌に学ぼう」という見出しで，福岡県田川市内の小学校の校歌がとり上げられた。そこで今回，昨年に続き，地域特有の歌詞表現という観点から，福岡市と筑豊地区という異った地区の中学校（福岡市67校，筑豊地区40校）の校歌をとり上げ，分析研究することにした。

この福岡市と筑豊地区は距離にして，およそ35kmであるが，風景，自然環境などの面では全く異なっている。例えば海についてであるが，福岡市は博

多湾に面しているのに対して，筑豊地区は海とは，ほど遠い。一方筑豊地区はかって，炭鉱の町，産炭地として栄えたところであり，福岡市とは全く異なる環境にある。この地域環境の違いから考えると，校歌においてもそれぞれ違った表現が表わされているであろうと判断できる。

1．福岡市と筑豊地区の地域的特徴

(1) 福岡市

福岡市は明治22年（1889年）に市制を施行し，現在は日本国内８位の人口を擁する大都市で，アジアの主要都市（ソウル，上海，北京，台北など）との距離も近く，外国との交流は非常に盛んである。北は玄界灘，南は背振山地，東は三郡山地に囲まれた半月型の福岡平野に位置している。

人口は平成2002年４月１日現在で，1354114人と多く，まだ増加の傾向にあり，年令構成も比較的若く（38.6才，指定都市で第２位），全体が活気にあふれている。特に第三次産業を中心に九州の中心的存在である。また交通の要所として，空港，港，鉄道網，バス路線が充実し，福岡県内はもちろん，九州各地から通勤，観光，レジャー等で多くの人々が集まり，活況を呈している。自然環境としては，何といっても山と海とに囲まれたすばらしい空間と言える。

(2) 筑豊地区

筑豊地区は，筑豊炭田という言葉で代表される程，炭鉱を抜きにしては語れない。筑豊炭田は我が国最大の産炭地として，三池炭鉱と共に，明治20年代から30年代にかけて，急速に開発が進んだ。田川では明治22年，田川採炭が筑豊屈指の大炭鉱を開発し，明治33年に三井田川炭鉱の経営に移され，昭和20年代まで活況を呈していた。

当時の炭鉱で働く人々は苛酷な労働にもかかわらず，また鉱夫納屋（大正時代から鉱夫社宅となる）での生活にも負けず，気さくで，明るく，誰彼の

別なく挨拶を交わし，お互い助け合って暮らしていたと言われる。喜びも悲しみも共に分けあって生きていけたのは，炭鉱で暮らす人達の連帯感からくる人間の暖かさが肌に伝わってくるからであった。しかし炭鉱の労働者は成人はもちろん，成人に達しない少年や女性，子供までに及び，苛酷な労働の実態は想像絶するものがあった。昭和30年の石炭合理化対策で多くの離職者を出し，昭和44年９月新田川炭鉱の閉山を最後に，最盛期15000人を越す炭鉱労働者を抱え，年産2000万トンを超える筑豊最大の炭鉱であった三井田川の歴史を閉じたのである。

８才の時から坑内に入り，困窮の中から石炭事業を興こし「具島王国」の礎を築いた，具島太郎（1844年～1916年）が私財を投じて設立したと言われる大之浦小学校（現在の田川市立大浦小学校）の校歌には次のような歌詞が盛られている。

はっぱのひびきたくましく
伸びる炭都のその力
うけて勇んで新日本を
担う子，良い子，未来の子
みんななかよく，はつらつと
すすむ大浦小学校

炭層を火薬で爆発する代表的な言葉として「はっぱ（発破）のひびき」という歌詞がいかにも校区の環境を如実に物語っている。

また歌詞の中には，田川市を代表し象徴する言葉「炭都」が歌われている。また後述するが「自治」という言葉が筑豊地区の校歌に多く歌いこまれているのも特色といえる。

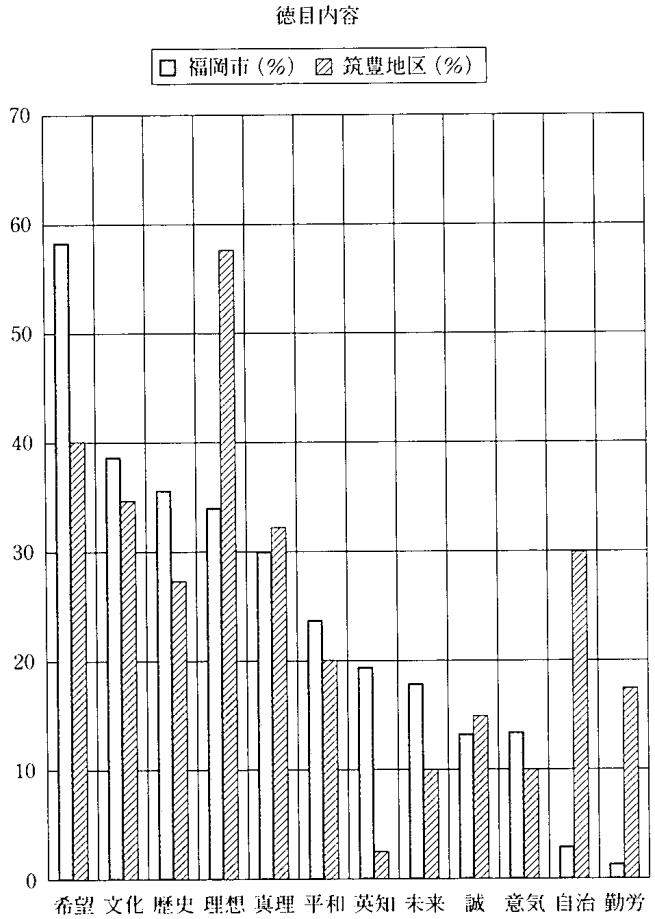
このようにそれぞれの地域には特色があり，その環境が校歌に歌われ，子供達に語り継がれていくのであろう。

2．校歌の歌詞に見られる特色と考察

(1) 校歌にみられる徳目的内容について

数字は％

	福 岡 市	筑豊地区
希　望	58.2	40.0
文　化	38.8	35.0
歴　史	35.8	27.5
理　想	34.3	57.5
真　理	29.8	32.5
平　和	23.8	20.0
英　知	19.4	2.5
未　来	17.9	10.0
誠	13.4	15.0
意　気	13.4	10.0
自　治	2.9	30.0
勤　労	1.4	17.5



徳目的文言についてみると，福岡市，筑豊地区の両地区に共通して「希望」「理想」という表現が特に多く占めていることがわかる。即ち「希望」（福岡市58.2％，筑豊地区40.0％）は他の文言に比して多く使用されている。例えば，「限りなき希望を乗せて新しき国育（はぐ）くまん……」（福岡市東光中）「真実（まこと）の道を学ぶ日々希望の調べ湧き起こる……」（福岡市福岡中）「希望の光，今ここに，仰ぎて行かん，我が母校……」（筑豊，稲築東中）などと多くの校歌に歌われている。

ここで「希望」という文言について調べてみると，「こうありたいと願い望むこと，またその気持，将来に対する明るい見通し，可能性」(注3)「あることを成就させようとねがい望むこと，また事柄，ねがい，のぞみ」(注4)とある。

これから察知できるように，中学生という多感な時期に，これから進む将来に，明るいのぞみを持たせたいという切実な願いが，また，のぞみをもってはばたいてほしいという願いが込められていると言える。

次に「理想」（福岡市において34.3%，筑豊地区において57.5%）でわかるように，筑豊地区においては特に多く使用されている。

例えば，「仰ぐ理想に燃ゆる胸，清い抱負にこの力……」（筑豊，桂川中）「伝統誇るわが母校，明日の理想にはばたきて……」（筑豊，伊田中）「自然のめぐみ地に受けて，久遠の理想もとめんと……」（筑豊，飯塚第二中）などという表現が見られる。

ここで理想という文言を調べてみると，「完全で最高，最善のものとして考えられたもの，状態，努力の究極的目標とされるもの」(注5)「現実的なものの発展の究極として考えられる最も完全な状態で欲求，努力の目標となるもの」(注6)の意味をもっていることがわかる。これも「希望」と同様に，子供達の未来に目標を描かせ，それを目標として，育っていってほしいという願いが強くこめられていると考えられる。この「希望」と「理想」は人生において生涯追い続ける存在であるという点では共通していると言える。

人間今に満足せず，次へ次へと目標をたてそれに前進しようという強い思いが，この「希望」「理想」という言葉に込められている感じることができる。人生のテーマと言える「希望」「理想」は当然多くの人々にあてはまる人生における目標であることから考えると校歌に歌われるにふさわしい徳目と言えよう。

グラフから見て分かるように，もう一つの特徴は筑豊地区の校歌に使用されている「自治」「勤労」の言葉である。

「自治」は福岡市においては2.9%であるのに対して，筑豊地区では実に30.0%であり「勤労」は福岡市の1.4%に対して筑豊地区は17.5%と格段の差が見られる。例えば，「生気あふるる学舎に，自治と自律の鐘はなる……」（筑豊，添田中），「伸びる緑の若草と競いて進む自治の丘……」（筑豊，赤池中）「掲げし自治の旗の下，苦節に耐えて幾年ぞ……」（筑豊，稲築東中）

などのように歌の一節に「自治」という言葉が多く使われている。この自治については，「自分のこと，あるいは自分達のことを自身で処理し，治めること」(注7)というのが一般的な解釈と判断できるが，「集団の自己管理と解することができる。学校教育においては，児童生徒，みずからが所属する集団生活の向上発展のために成員の意志を尊重しながら社会的ルールを作り，それに基づいて集団活動を進める」(注8)という意味にも解釈できる。校歌に歌われるということは，その背景として，地域環境に「自治」を求める雰囲気が漂っている表われであろう。

一方「勤労」については，「勤労汗も輝きて，理想のあすをのぞみつつ……」（筑豊，中央中）「勤労共に君よわれ，あしたを夢み歌ほがら……」（筑豊，嘉穂中）「望む理想に湧く血潮，勤労の道歩まんと……」（筑豊，大任中）などのように歌われている。「勤労」というのは，「心身を労して仕事に勤めること，勤めにはげむこと，また勤務の労苦」(注9)とある。

このことからもわかるように「勤労」には「汗して働く」「働くことの苦労」ということが込められている。炭鉱という他に例を見ない厳しい労働に対する思いが，読みとれる。

筑豊地区は産炭地として栄えたところであり，重労働を強いられた人々は，自分達の力で自分達を守り，治めていくという自治の精神をお互いに確認していたと考えられる。そこには，人々が力を合わせ，そしてお互いが処理し，治めるという精神が脈々と流れていることが理解できる。

「自治」，「勤労」という言葉が30%，17.5%の多くを占めるということは，炭鉱という地域環境の中から導き出された言葉であり，校歌という歌詞の中に願いをこめ，思いを伝えようとしていることがよくわかる。正に筑豊地区特有の表現であろう。

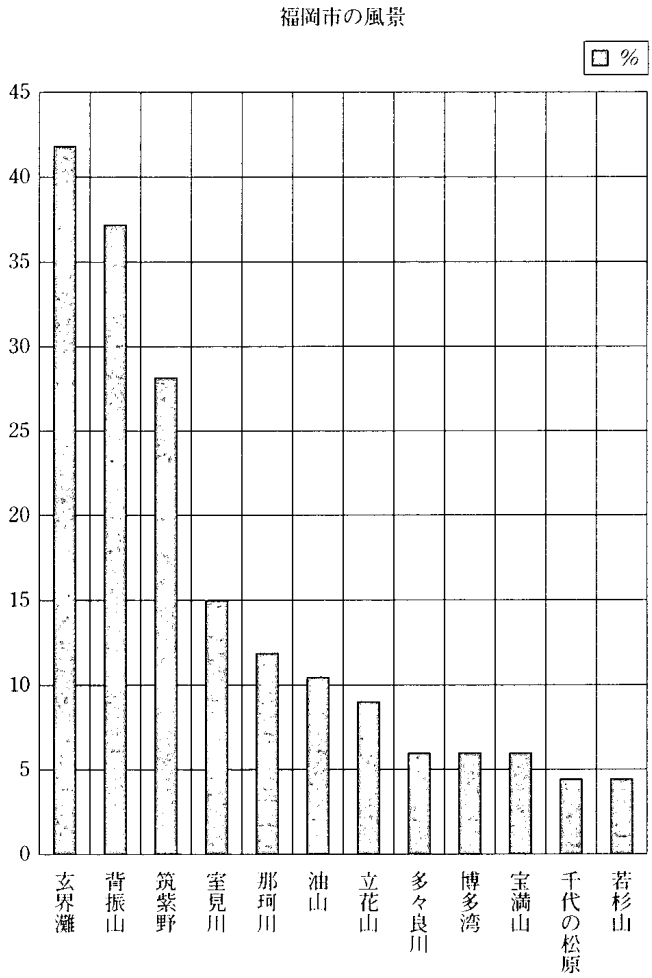
(2)校歌に見られる地域の風景を表わす表現

私が教師として最初に勤務した福岡市立城西中学校の校歌を見ると，「晴れ渡る青空のもと，聳(そび)え立つ背振を前に……」（1番）「玄海の怒濤(どとう)の如く，

おし寄せる世界の文化……」（２番）というように福岡市を代表する背振山，玄界の海が校歌に歌われている。これは福岡市のシンボル的風景の１つと考えられる。このことから地域を代表するシンボル的風景について，福岡地区と筑豊地区ではどのような表現が校歌に歌われているかと分析してみると，次のようになっている。

ア．福岡市（67校）

福岡市の風景	%（回数）
玄　界　灘	41.7(28)
脊　振　山	37.7(25)
筑　紫　野	28.3(19)
室　見　川	14.9(10)
那　珂　川	11.9(8)
油　　山	10.4(7)
立　花　山	8.9(6)
多々良川	5.9(4)
博　多　湾	5.9(4)
宝　満　山	5.9(4)
千代の松原	4.4(3)
若　杉　山	4.4(3)



地域の風景に重点をおいて，福岡市立中学校（67校）の校歌を分析してみると，「玄界灘」と「背振山」が圧倒的に多く歌われていることがわかる。「玄界灘」41.7%「背振山」37.3%であった。「玄界灘」「背振山」がいかに福岡市住人にとって大きな存在であり，シンボルであるかがよくわかる。

玄界灘は，福岡市の東区から西区にいたる全地域にまたがる雄大な海岸線をもち，福岡市民にとっては，最高のシンボルであると言える。玄界灘に関

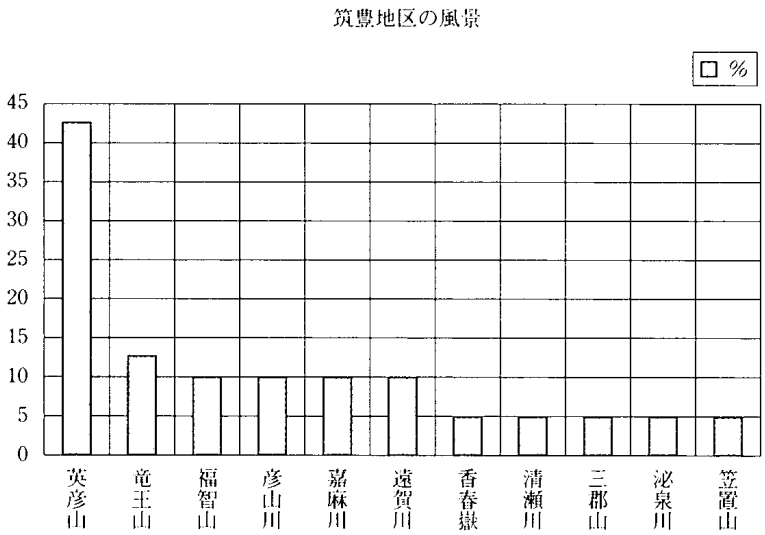
する校歌の一部を紹介すると次のようなものがある。

「玄界灘の波高く，奈多の浜辺に潮鳴りて……」（福岡市，和白中）「玄界灘の荒磯の岩に，とどろく潮，若き力よ拓けいく……」（福岡市，北崎中）「朝日に映える玄界灘の若い潮に励む我等よ……」（福岡市，香椎第一中）などがあり，実に東区から西区に至るまで多くの学校に歌われている。

また「背振山」は，標高1055.2mの高さがあり，西北西と東南に長大な屋根を延ばして背振山地を構成しており，西端は佐賀県唐津に至る。山頂からの眺望は絶景で，阿蘇，雲仙，英彦山まで見ることができ，福岡市が誇れる山である。

イ．筑豊地区（40校）

筑豊地区の風景	%（回数）
英　彦　山	42.5(17)
竜　王　山	12.5(5)
福　智　山	10(4)
彦　山　川	10(4)
嘉　麻　川	10(4)
遠　賀　川	10(4)
香　春　嶽	5(2)
清　瀬　川	5(2)
三　郡　山	5(2)
泌　泉　川	5(2)
笠　置　山	5(2)



筑豊地区の風景を調査してみると，圧倒的に多かったのが「英彦山」である。実に42.5%の学校で歌われている。「英彦山」は，田川郡添田町と大分県山国町の境界にある山で，標高1199.6mである。英彦山は主峰は山頂部は北岳，中岳，南岳の３峰に分かれており，三局点は西端の南岳である。山頂からの眺望は雄大で，久住山や三郡山地など北九州の主な山のほとんどが一望できる。添田町立英彦中学校の校歌には，英彦山の雄姿を次のように歌っている。

朝日うららに　英彦の峰
ゆるがぬ姿　仰ぎ見て
学ぶ行く手に　湧く希望
ああ興隆の　我が母校

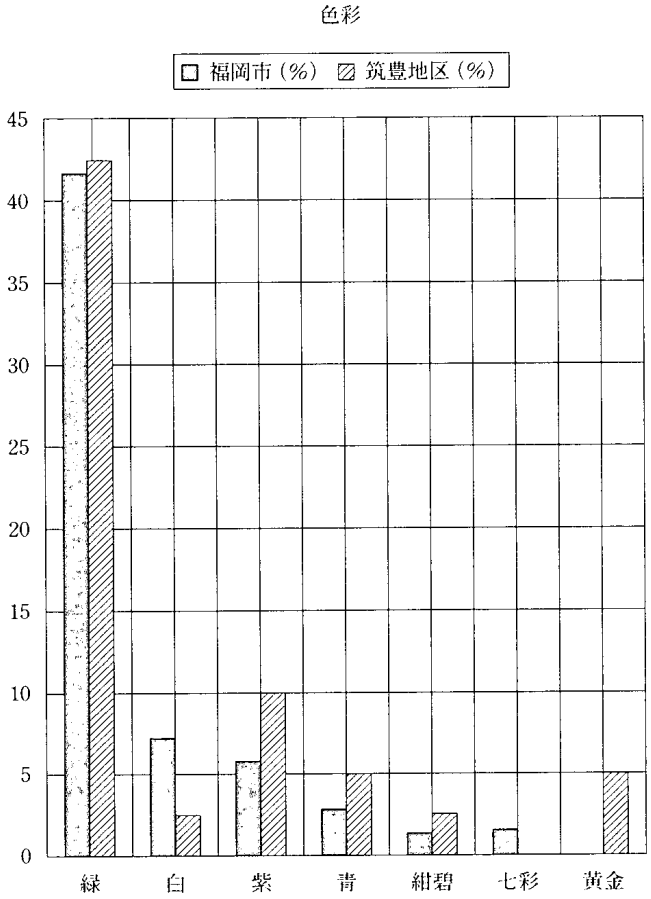
我が地域に誇る英彦山の雄姿を「ゆるがぬ姿，仰ぎ見て，学ぶ行く手に湧く希望……」と歌う生徒達の様子が目に浮ぶようである。

このようなことから見ても，筑豊地区のシンボルとして「英彦山」が多くの学校で歌われていることは十分に理解できる。

(3)校歌に見る色彩表現について

数字は％

	福 岡 市	筑豊地区
緑	41.7	42.5
白	7.4	2.5
紫	5.9	10.0
青	2.9	5.0
紺　碧	1.4	2.5
七　彩	1.4	0
黄　金	0	5.0



福岡市，筑豊地区共に色彩の面では「緑」が圧倒的に多く使用されている。「緑」という色は，「草木の葉の色，新芽，若葉，その他に緑の風のように，さわやかな印象を与えるものに使う」(注10)とある。他に「緑を象徴するものと

しては，さわやかな若さ，平和，新鮮さ，安息，安全，平静，郷愁などがあげられる。このように緑は特に特に強い印象を与えないこと，自然の色と結びついていることから，見た人に平穏な感じを与えるといえよう」(注11)とある。

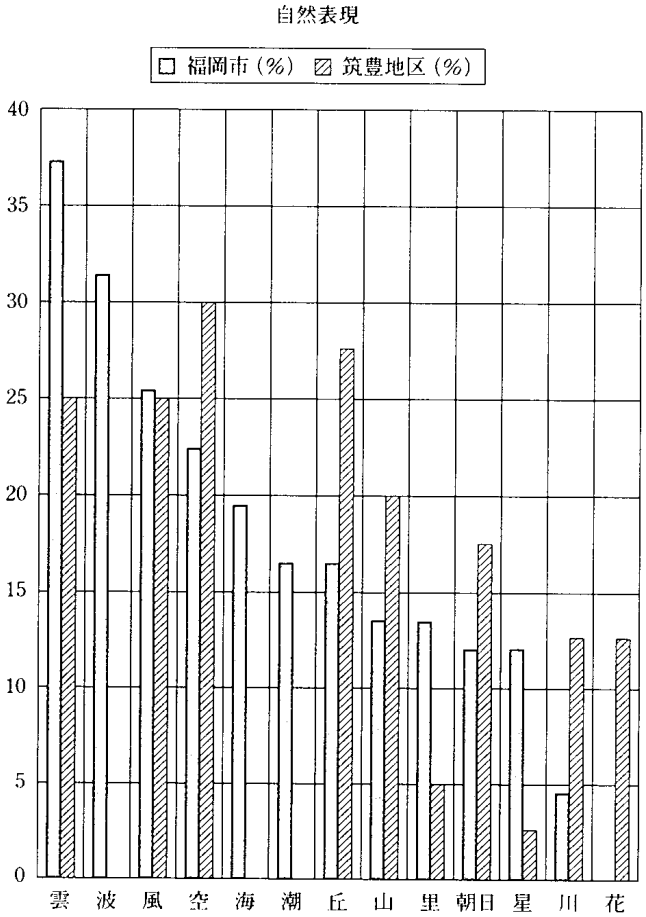
校歌の中では，次のように歌いこまれている。「緑爽(さや)けき若竹の真直(まっす)ぐに生(お)うる逞ましさ……」(福岡市，香椎第一中)，「緑に映ゆる丘の上，希望にもゆる若人の，伸びる力の歩みあり……」(筑豊，菰田中)，「緑も深き，鴻(こう)の巣を後に仰ぐ丘の上，知恵を磨き今日もまた……」(福岡市，長丘中) などという表現がなされている。

やはり緑は新鮮で若々しいという感じに使われていることがわかる。このことは，若さという特徴を生徒達に重ねて歌われているのではないかと思う。新芽，若葉が上へ上へと向って一生懸命に伸びようとする勢いのある姿というのは，生徒達の姿と同様ではないだろうか。またその願いから，多くの校歌に表現されていると考えられる。

(4) 校歌に見る自然表現について

数字は%

	福 岡 市	筑豊地区
雲	37.3	25.0
波	31.3	0
風	25.3	20.0
空	22.3	30.0
海	19.4	0
潮	16.4	0
丘	16.4	27.5
山	13.4	20.0
里	13.4	5.0
朝 日	11.9	17.5
星	11.9	2.5
川	4.4	12.5
花	0	12.5



校歌の中に自然表現をどのように表わしているかについてみると，「雲」（福岡市37.3%，筑豊25.0%），「風」（福岡市25.3%，筑豊20.0%），「空」（福岡市22.3%，筑豊30.0%），「丘」（福岡市16.4%，筑豊27.5%），「山」（福岡市13.4%，筑豊20.0%），「朝日」（福岡市11.9%，筑豊17.5%）などが共通して多く使われていることがわかる。これは，福岡市においても，筑豊地区においても，共通した自然現象と考えることができる。

例えば，「雲」については，校歌の中で次のように歌われている。

「空に湧き立つ雲の如と，膨らむ希望胸にして……」（福岡市，博多中）「はるかに仰ぐ油山，湧き立つ雲よ咲く虹よ……」（福岡市，警固中）「青雲はるかに英彦の高きをあおぐ，わがひとみ……」（筑豊，伊田中），「朝日に映える竜王の，嶺に湧きたつ雲を見て……」（筑豊，飯塚第一中）このように見てくると「雲」は，湧き上がることや，心が躍るなどを比喩的に表現していると考えることができる。

次に「風」については，「室見の流れ，風そよぐ，水に映(うつ)ろう早良野よ……」（福岡市，田隈中）「玄界灘の波高く，風は自由を窓に呼ぶ……」（福岡市，原中央中），「空も輝く桂川の，窓に明るくそよぐ風……」（筑豊，桂川中）「木の間をそよぐ風さやか，友愛花と咲くほとり……」（筑豊，幸袋中），などのように使われている。

即ち，さわやかさ，すがすがしさの思いを込めて歌われていることがわかる。また辞典によると，「勢い」という意味もあり，「さわやかな，はつらつとした勢の良さ」という意味がよみとれる。

「空」は，校歌の中では次のように歌われている。「彼方の空を見遥(みはる)かす，学び舎の窓いや広く，平和と文化の礎を……」（福岡市，老司中）「空も輝く桂川の，窓に明るくそよぐ風……」（筑豊，桂川中）などと歌われているところから見ると，雄大さを見上げる，さわやかな気持が読みとれる。

今回の分析で，二つの地区を比較して特徴的なことは，福岡市が海に囲まれている関係から「波」「海」「潮」という海に関する表現が多く用いられていることである。例えば「玄界遠き波の音，朝夕集う窓近く，真実(まこと)の道を学

ぶ日々……」（福岡市，福岡中），「輝く浪に偲ぶ歴史，海あり玄界，此処に飛沫（しぶ）く……」（福岡市，姪浜中）「遥かに響け玄界の，輝く潮この若さ……」（福岡市，箱崎中）などのように，それぞれ表現されている。筑豊地区においては，海に面していないために「波」「海」「潮」などという表現は全く見られないという特徴がある。これは正に地区比較における，福岡市の特徴といえる。玄界灘に浮ぶ小呂島の小呂中学校の校歌は次のように海，満載である。何と感激的な校歌であろう。

1．父が築いた　玄界の
沖にはためく　大漁旗
波止に迎えの　手を振れば
船足軽い　機動船
あああ　我等の我等の
小呂に　力あり

2．赤い瓦に映える陽を
海を学びの　友として
島に生まれた　喜びと
友と磯辺に語るとき
あああ　我等の我等の
小呂に　若さあり

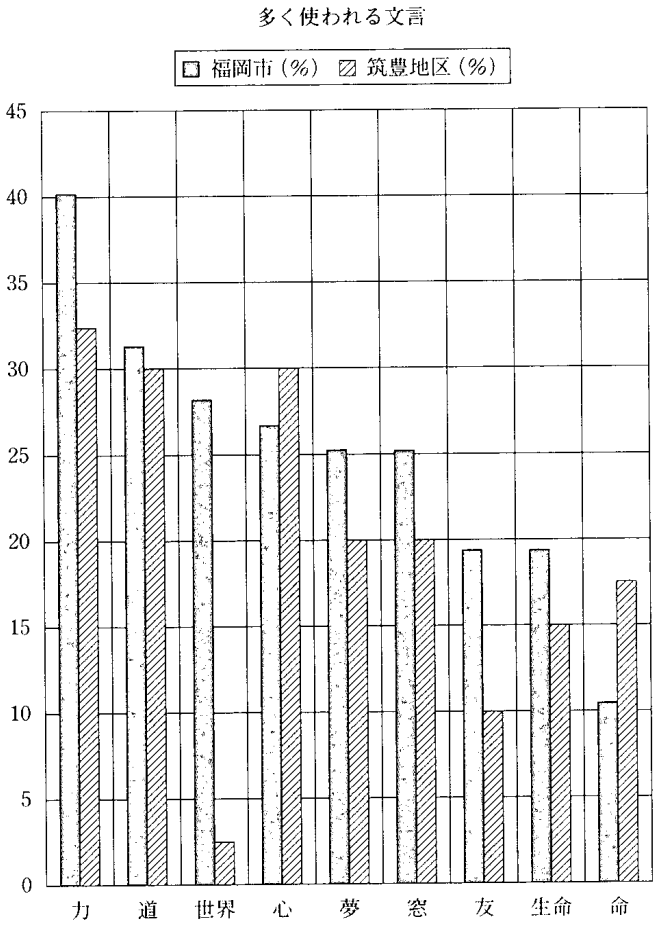
3．闇に輝く　灯台に
翼休める　渡り鳥
夢は世界に　羽ばたいて
潮路広がる　雲の果て
あああ　我等の我等の
小呂に　望みあり

このように見てくると自然環境と校歌の歌詞とは実に密接な関係が，ひしひしと伝わってくる。

(5) 校歌の中に多く使われる文言

数字は％

	福 岡 市	筑豊地区
力	40.2	32.5
道	31.3	30.0
世 界	28.3	2.5
心	26.8	30.0
夢	25.3	20.0
窓	25.3	20.0
友	19.4	10.0
生 命	19.4	15.0
命	10.4	17.5



この分析でわかる通り，校歌の中で共通して多く使われている文言に「力」（福岡市40.2％，筑豊30.0％），「道」（福岡市31.3％，筑豊32.5％），「心」（福岡市26.8％，筑豊30.0％），「窓」（福岡市25.3％，筑豊20.0％）がある。

まず「力」については，「梢の風に故里（ふるさと）の，昔を偲び新しく，生きる力を強く持て……」（福岡市，志賀中）「英知と力を求めつつ，皆只管（ただひたすら）に努めなん……」（福岡市，吉塚中），「若き力はすこやかに，ともにいたわり，励まなん……」（筑豊，金川中）「たゆまぬ力，身にしめて，はげまん友よこの誇り……」（筑豊，稲築東中）などと，力強い表現がなされている。この「力」という表現には，「感じたり，考えたりする働き，能力，根気，気力，精力」(注12)「学問，技芸などの種々の能力，実力，気力，元気，意気込み」(注13)や，ある目的に向っての集中した働きかけ，骨折り，尽力努力，精進，などとも考えられる。

生徒の中に秘められているこのような，「力」を歌詞の中に歌いこむことによって，未来を託する生徒達に願いをこめているように思える。若い力を精いっぱい出して，生きてほしいという願いともとれる。

次に多く使用されている文言に「道」がある。この文言は「目的，結果などに至りつくべきみちすじ，到達，達成のためにふまねばならぬ過程」(注14)「物の道理，ことわり，また人として踏まねばならないとされる行動の筋道，道徳」(注15)とある。

校歌の中では，「まことの道を究めつつ朝な夕なに睦みあう……」（筑豊，赤中），「燃ゆる希望に湧く力，正義の道を進まんと……」（筑豊，大任中），「朝夕集う窓近く，真実(まこと)の道を学ぶ日々……」（福岡市，福岡中），「これを教えの基として，道を修むる若人の……」（福岡市，三宅中）などと歌いこまれている。

目標を求めつつ，前途の希望に向って，信じていけば，その道は開けるというような，励ましの言葉に聞える。即ち目標に向って踏まなければならない道を皆で乗り切ろうと願っているように思えてならない。

「心」という文言も，福岡市（26.8%）筑豊地区（30%）と共に多かった。実際に校歌の中には，「強く心にひびき合う，自然のさとし身にしみて……」（福岡市，原中央中），「光を添えん，美を添えん，これを心の糧として……」（福岡市，三宅中）「松の緑のしたたりを，心にうけて仰ぐとき……」（筑豊，頴田中）「われらが心ににおうなり，ともにいそしみ，みがかなん……」（筑豊，金川中）などと表現されている。

この「心」について調べてみると，「自分の考え，気持の最も深いところ，まごころ本当の気持，本心」(注16)「動物，特に人間の知識，感情，意志など精神活動の総称，また，それらの精神活動の中枢と考えられるもの，情緒を解し，他のものに同情を寄せる人間らしい気持」(注17)という意味が見られる。またこれは，身体の部位で表現された「胸」という表現と同じにとらえられている気もする。最も大切な心が胸と重なり，物事を受け止める大事なところいうことを指しているように見える。

「夢」も福岡市（25.3%），筑豊地区（20.0%）と多くの学校で歌われている。実際の校歌の中では，「知徳を磨き身を鍛え，夢も楽しく励みあう……」（福岡市，早良中），「静寂の朝空澄みて，英知の瞳，夢遥か……」（福岡市，香椎第三中），「郷土の幸をにないつつ，雄飛を誓う夢若き……」（筑豊，伊田中）「理想のあすをのぞみつつ，祖国の夢を築くもの……」（筑豊，中央中），などと歌われている。「夢」には，「たやすく実現できない願い，理想と予想されるもの，将来は実現させたい理想，考え」(注18)という意味がある。たやすく実現できないものだからこそ，大きな希望を抱き，人生をかけて，それに向って努力し続けていこうという思いが感じられる。

ここでもうひとつ特徴的なのが「世界」という文言である。実際の校歌の中では「玄界の怒濤の如く，押し寄せる世界の文化……」（福岡市，城西中），「世界の国に先駆けて，文化の国を築んと……」（福岡市，多々良中），「ここを心の郷として，世界に向けて，はばたかん……」（福岡市，青葉中）「夢と希望は果てしなく，世界に羽ばたく若人が……」（福岡市，横手中）などと歌われている。

この「世界」という文言は数字にあらわれている通り，福岡市と筑豊地区では，著しい差がある。福岡市では，28.3%，（19校）において使われているのに対して，筑豊地区では，わずか1校で2.5%である。このことは，福岡市と筑豊地区の歴史，環境が大きく影響していると言える。

福岡市の概要で述べたように，古くから外国との交流が盛んで，特にアジアとの交流の窓口である。「アジアに開かれた都市」という福岡市が掲げた大きな方針がある。このように多くの学校で「世界」が歌われていることは，福岡市という地から，世界を切り開いていこうとする姿勢がうかがえる。また世界に目を開いてほしいという願いが読みとれる。

また，この表には示されていないが，筑豊地区には筑豊炭田を意味する独特の言葉が多く使用されている。例えば，「広く田川の土深く，埋もる宝庫もたゆまざる……」（筑豊，池尻中），この歌詞の「土深く埋る宝庫」というのは正に石炭そのものを意味した言葉である。次に「大地にひびく堅坑のた

ゆまぬ力身にしみて……」（筑豊，稲築東中）である。ここでいう「堅坑」とは，炭坑において垂直に掘削された坑道において，巻き上げ機で，鉱石，石炭，人，資材などを運搬していたところである。

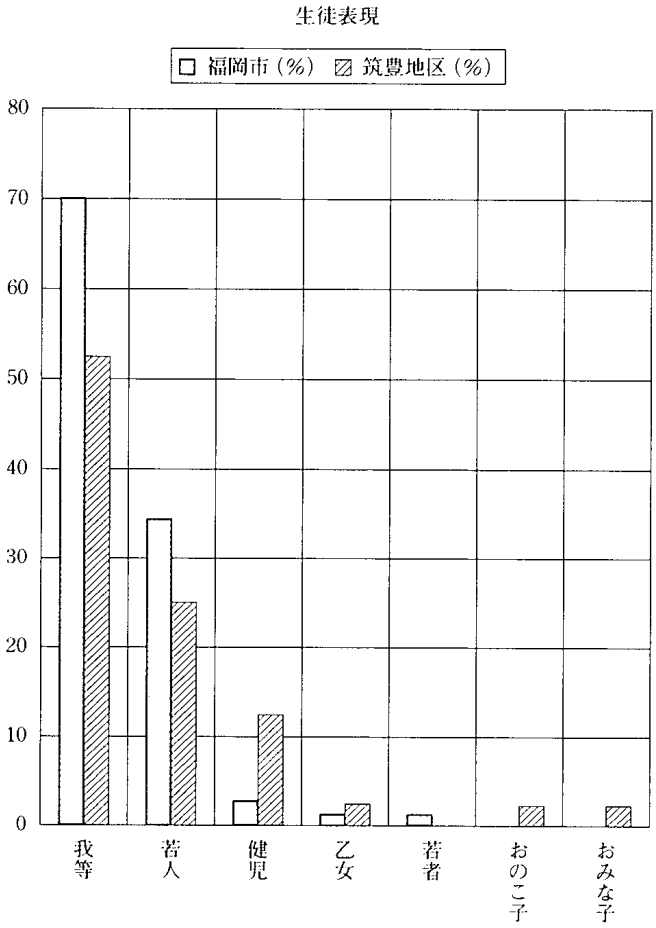
「炭田つづく筑豊の，力みなぎる空のもと最善つくし伸びてゆく……」（筑豊，飯塚第一中）においても，炭田そのものを校歌に歌いこんでいる。このように筑豊地区の小学校，中学校の校歌の歌詞の中には，筑豊を代表する象徴的な言葉が歌われている。産炭地として歴史的に有名な地で，かつて石炭採掘に従事した人達のように，自分達で自分達のことをするという「自治の精神」や「協調性」「団結力」というすばらしい気質を子供達に身につけさせ，力強く，たくましく育ってほしいという強い願いがあっての言葉であろう。

また自分達が生活している町が炭鉱で栄えたということ，それに従事した労働者の苦悩やきびしい労働の実態を決して忘れず胸に思いとどめ成長していくように促していると思えてならない。このように筑豊地区に限定された「炭田」「堅坑」「炭都」「自治」「勤労」などという表現により，その地域独特の歴史的背景を知ることができる。

(6) 校歌の中にみられる生徒表現

数字は％

	福 岡 市	筑豊地区
我　等	70.1	52.5
若　人	34.3	25.0
健　児	2.9	12.5
乙　女	1.4	2.5
若　者	1.4	0
おのこ子	0	2.5
おみな子	0	2.5



学校における子供たち・生徒をどのような言葉で校歌の中に表現するかは，非常に興味深いものがある。今回の調査で「我等」という表現が圧倒的に多く，福岡市で70.1%，筑豊地区で52.5%，であった。また「若人」も福岡市で34.3%，筑豊で25%と多い「我等」には，「われわれ，私たち，自分たち」，また「若人」には「年若いひと，若年」という意味がある。校歌の中では，次のように使われている。

「我等が抱負，創造の歓喜……」「我等は学ぶ，近代の文化……」（福岡市，姪浜中）「ああ我等，舞鶴中学校」（福岡市，舞鶴中）「おお，我等の中学城西……」（福岡市，城西中）「ああ学ぶ我等，玄洋玄洋……」（福岡市，玄洋中）「おお我等，誓いも固く…」（筑豊，鷹峰中）「我等，若人いざや励まん」（筑豊，池尻中）

このように「我等」は校歌の最後のフレーズで呼びかけるように，まとまりを求める形で使用されていることがよくわかる。

また特徴的なものとして，筑豊地区においては，「健児」という言葉が48校中，6校（12.5%）使用されている。この言葉は「血気さかんな男，若者」と解釈されるが，炭鉱地区における独特の男性的表現であり，力強さを願っているとも考えられる。

ここでもうひとつ特徴的なのは筑豊地区川崎町立川崎中学校の校歌である。

1．英彦の朝日を　真にうけ
　光るいらかぞ　美わしく
　希望にもゆる　おのこ子の
　集う学舎　栄あれ

2．永き歴史の　夢さめて
　すべて新たの　道遠く
　平和にすすむ　おみな子の
　集う学舎に　光あれ

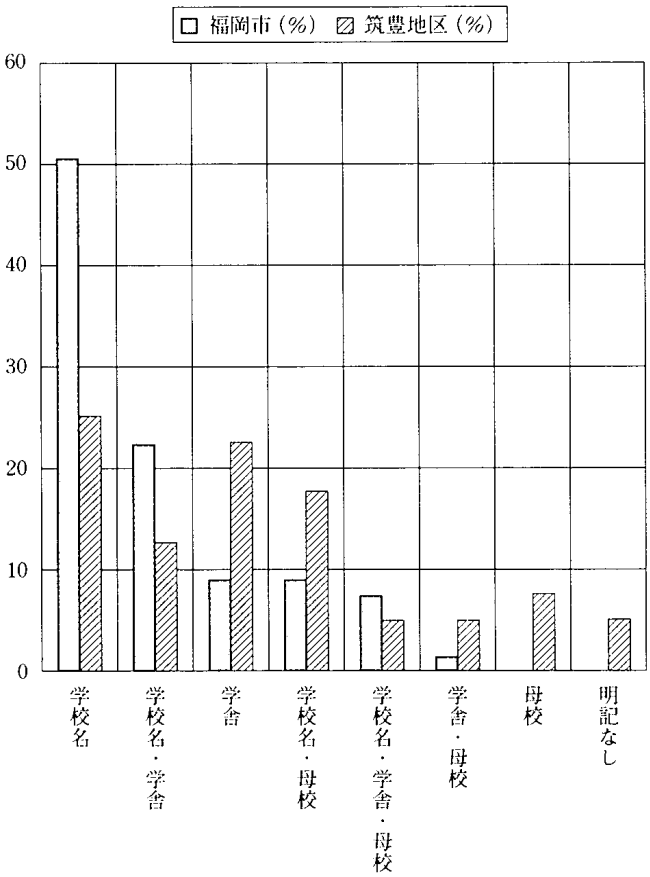
この校歌ではいう「おのこ子」「おみな子」はいずれも古語で，「若い男子」「若い女子」という意味に解される。校歌の作詞者「伊藤民子」の思いがど

こにあったかは，別にして，男子と女子を別々に分けて表現する方法は，この校歌より外には見られない。

(7) 校歌にみられる学校表現について

数字は%

	福 岡 市	筑豊地区
学 校 名	50.7	25.0
学校名･学舎	22.3	12.5
学　　舎	8.9	22.5
学校名･母校	8.9	17.5
学校名・学舎・母校	7.4	5.0
学舎・母校	1.4	5.0
母　　校	0	7.5
明記なし	0	5.0



学校表現については，表に示す通り，いろいろの表現がある。その中で最も多いのは，自分の学校名を入れているところである。福岡市では50.7%，筑豊地区で25%となっている。その他学校名に学舎（まなびや）を加えた表現が多い。また学校名に「母校」を加えた表現も多く見られる。このように見てくる，何らかの形で学校名で歌われている校歌は，福岡市で88.3%，筑豊地区で60%と多いことがわかる。学校名を歌うことで，自分の学校への愛着ということが湧くことを願ってのことだと考えられる。

また，もうひとつ特徴的なことは，学校名を数回繰返す校歌が福岡市において，実に8校にのぼる。代表的なものを列記してみたい。

○ああ学ぶ我等，玄洋，玄洋中学校（玄洋中）

○校舎の窓に，城西，城西ああ我等の中学城西（城西中）

○競い振わん　若き力　元中，元中，元中，我等が母校よ（元岡中）

○ああ希望ある学舎，平尾，平尾，平尾，我等が母校（平尾中）

○拓こうよ，英知の虹の輪　創造の学舎多々良，多々良中央中学校（多々良中）

○集う学び舎　下山門　われらが母校　下山門（下山門中学校）

このように，学校名を繰返すことによって，結束し，母校の意識を高めようといていることが感得される。生徒達が日頃校歌を歌う中で，１番から３番の繰返しをするならば，いやが上にも自分の学校に対する意識は高まるであろう。

おわりに

今回は校歌を地域環境の大きく異なる，福岡市と筑豊地区という二地区の比較において検討してみたが，多くの類似点と相異点があることがわかった。

まず校歌を項目ごとに分析してみると，共通して生徒に対して前向きな姿勢へとつながる文言が圧倒的に多い。どれをとっても悲観的にとらえられる文言は全くない。

徳目では「希望」「理想」が両地区もに上位を占めている。この文言が意味する通り，明るい希望，豊かな理想を子供に託していることがわかる。このことは，色彩についても「緑」という色が圧倒的に多かったことからもよくわかる。両地区に共通して多く使用されているということは，その意味することの大きさを表わしている。

第二に，校歌はその地域が囲まれている環境に大きく影響されていることがわかる。例えば，海に面している福岡市の学校においては，「海」「潮」「波」「船」等のように海に関する言葉が非常に多く使用され，筑豊地区との大きな違いを見ることができる。

また筑豊地区は炭坑との関係を無視することはできない。前述の歌詞でも記したように，「堅坑」「炭都」「炭田」「発破」など，他の地域では全く見られない文言が産炭地の思いとして込められている。このような校歌を歌うことは，地域の歴史を見つめなおすのに最もふさわしく，いつまでも自分にの心に残るのではないかと思う。また，地域独特の歴史的背景を知ることができる。

第三に，地域に見られる特色ある表現については，その地域に親しみのあるシンボル的な風景が歌にこまれている。特に福岡市においては，全市的に「玄界灘」「背振山」という福岡市にとってはなくてはならない風景が非常に多く歌われている。これに対して，筑豊地区では「英彦山」が何といってもシンボルであることがわかる。

最後に，校歌というのは，その学校の設立の思い，学校の願いを歌詞にのせて，生徒に訴えていることが，はっきりと読みとれる。正に生徒達に対する応援歌である。いつも目にする風景，山や河川，また歴史的事実を歌詞に歌いこむことで，自分達の歌として思いをこめているのではないかと思える。校歌とはこのように心に残る最も不思議な力を持つものであると言えるし，世代を超えて歌い継がれるものであり，同窓の財産である。校歌は私達にそこにいた，学校生活を送ったという証のようなものであるとも考えられる。

今回研究をすすめるにあたって，福岡市教育委員会中学校教育課，及び福岡県教育委員会筑豊教育事務所学校教育課には校歌の収集などを通して，また，田川市石炭資料館には炭鉱の歴史を知るうえで貴重な資料を提供していただいたこと対して，お礼を申し上げたい。

引　用

注１　拙論「校歌に関する調査研究１」「福岡女学院大学研究紀要」第11号　P45
注２　同上
注３　日本語大辞典　講談社　P522
注４　広辞苑　岩波書店　P597

注５　日本語大辞典　講談社　P2289
注６　国語大辞典　角川書店　P2210
注７　日本語大辞典　講談社　P944
注８　現代学校教育大辞典　P395
注９　日本国語大辞典　小学館　P1028
注10　日本語大辞典　講談社　P2100
注11　日本大百科全書22　P376
注12　日本語大辞典　講談社　P1368
注13　国語大辞典　角川書店　P1325
注14　日本国語大辞典　小学館　P1305
注15　大辞泉　小学館　P2540
注16　日本語大辞典　講談社　P768
注17　国語大辞典　角川書店　P734
注18　日本語大辞典　講談社　P2230

参考文献

福岡県郷土資料辞典　人文社
角川日本地名大辞典40福岡県　角川書店
筑豊　石炭の地域史　NHK ブックス